

BCS

PRIZE-WINNING WORKS

BCS賞受賞作品探訪記

22

第四六回受賞作品（二〇〇五年）

国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館 前編

一九四五年八月九日に原子爆弾が長崎に投下されてから五〇年を機に、国が原爆死没者に弔意を表し、恒久平和を祈る追悼施設が計画された。二〇〇三年七月六日に開館、昨年一〇周年を迎えた。前編は、祈念館が計画された経緯と、設計に込められた思いなどを紹介する。

地下2階、深さ約9mに祈念館の中心となる追悼空間が設けられている。ガラスの光柱が導く先に棚が立ち、原爆死没者名簿が安置されている。この方向の250m先が原爆落下中心地で、原爆が炸裂した上空500mの空が、トップライトから仰ぎ見る空に重なる。

戦後五〇年を契機とし、被爆地に設置が決まる

長崎市に国立原爆死没者追悼平和祈念館がオープンしたのは二〇〇三年七月六日。前年開館した広島市に次ぎ、原子爆弾投下により亡くなった人々や、その後亡くなった被爆者を追悼し、世界平和を願う目的で建てられた国立の施設である。現在の館長・智多正信氏が開館までの経過を解説してくれた。「長い間、原爆死没者に対して、国がどのようにして弔意を表すかという課題があったんです。そこで、一九八五年に厚生省（現・

厚生労働省）が行った原爆死没者の実態調査をもとに、一九九〇年、政府内で検討が始まりました。そして、翌年の一九九一年には慰霊施設について基本構想懇談会がつくられ、基本理念や施設の設置場所など具体的な内容が検討されていきました」。

その作業と並行し、一九九四年、戦後五〇年を契機に「被爆者援護法」が国会で成立。それまでの「原爆医療法」「原爆特別措置法」が一本化されたもので、四十一条に「平和を祈念するための事業」を行うことが定められた。法文は簡潔に事業を定義している。「（前略）原子爆弾による死没者の尊い犠牲を銘記し、かつ、恒久の平和を祈念するため、原子爆弾の惨禍に関する国民の理解を深め、その体験の後代の国民への継承を図り、及び原子爆弾による死没者に対する追悼の意を表す事業を行う」。この事業施設が二つの祈念館である。

その後、一連の開設準備のなかで、設計者が選定された。九州地方建設局（現整備局）の主催で一

九九七年、公募型プロポーザルが行われ、建築家・栗生明氏が率いる株式会社栗生総合計画事務所が選ばれた。

祈りの場を地下空間につくる

周囲を山に囲まれている長崎市の中心街から、三キロほど北に平和公園が広がっている。よく知られている平和祈念像がある丘と、長崎原爆資料館が建っている丘の間には、原爆落下中心地碑（爆心地）が位置する。祈念館の敷地は、原爆資料館の後方に立つ平和会館の前庭とロータリーがあった場所

で、当初の設計イメージは高さ五〇メートルの祈りの壁を立ち上げ、横方向からはタワーに見えるというものだった。祈りと平和のシンボルとして周囲の山からも臨むことができる。ところが、この計画は方向転換が図られることになった。法規上、公園のなかに建築可能な面積が、残り少ないことがわかったと同時に、地元への説明会のなかで原爆死没者の遺族の正直な気持ちが見えてきたからだ。栗生氏が当時を振り返る。「建築はいりません、とご遺族に言われました。ただ静かに祈る場所さえあればいい」と。栗生氏はこれを非常に重い



常緑のシラカシが周囲との結界のように水盤を囲み、静かな雰囲気をつくる。西側の地下で長崎原爆資料館と接続している。（提供：ナカサ&パートナーズ）

入口から地下2階まで階段がまっすぐに降りていく。奥深く、精神性を宿す空間を予感させる。壁面は杉板本実型枠によるコンクリート打ち放しと、アルミキャスト。





追悼空間へ向かう回廊。仄暗くゆるやかな空間は巡礼の道にもたとえられる。また、水を求めながら亡くなった被爆者のために水盤など7カ所の水辺が設けられている。水音がいつそうの静けさを感じさせる。

祈念館がある場所へ徒歩で近づいていくと、道路から見えるのは、こもりとした緑の生垣だけで、その途中に立つガラスのプレートが入口を示している。水盤の周りをゆっくりと左回りに四分の三周したところに、祈念館へ降りる階段がある。この巡りも祈りの場へ向かう心の準備となる。地下二階へまっすぐに階段が伸び、エントランスホールに降り立つ。追悼空間はエントランスの軸に並行して北東に配置されており、周囲を狭い回廊が巡っている。回廊の壁は、杉の木目板の重なりをコンクリート打ち放しに写し取ったもので、そこに歴史の積み重ねが表されている。その質感や表情は印象深く、人の気持ちに触れてくる。追悼空

間は死没者の名簿を取めた棚を安置し、祈る場がつけられており、二〇一三年現在で一万六二、〇八三人の姓名が銘記されているという。名簿棚に向かって両側にガラスの光柱が六本ずつ二列配置され、導かれるように柱の間に立つ。すると頭上にトップライトが現れ、そこに見えるのは爆心地の上空五〇〇メートルで、原爆が炸裂した空である。静けさ、清々しさを感じさせる建築の中に、平和への強いメッセージが込められている。「追悼空間のベンチに腰掛けて、半日を静かに祈って過ごされる遺族の方もおいでになります」と智多館長。平和のために祈りを捧げる場合は、国境や立場を越えて、あらゆる人に開かれている。



平和情報コーナー。長崎の祈念館は国際交流を推進する役割をもち、海外原爆展、放射線医療の情報提供などの拠点となっている。

言葉として受け止め、思い切った追悼施設をすべて地下に埋め込むことを提案した。

巡りながら心を静め、追悼空間へ向かう

地上にそびえるはずだった建築が、結果として、静かな地中へ身を沈め、さらに地下と地上が伸びやかにつながっている空間が設計された。地上に直径二九メートルの水盤を設け、地下二階には高さ八メートルの吹抜けの追悼空間がつけられている。水盤には高さ三メートルのガラスの光壁が浮かび、それがそのまま追悼空間へ降りて、光る列柱に変わるイメージでつくられている。「隣」の原爆資料館で原爆や戦争の



手記・遺影展示コーナー。広島・長崎の被爆者36,000人の肉筆の手記や遺影を所蔵し、閲覧することができる。

被害実態を知るのに対して、祈念館は祈りを中心に、未来への平和を願う場所ですから、希望を抱くことができ、鎮魂のためにも清涼感が感じられる場にしようと考えました」と栗生氏。ガラスは清涼感をもちながら、経年変化しない物質であることから選ばれた。また、この施設は無宗教であることが設計条件だった。「さまざまな宗教があるなかで、祈りの共通性を考えていくと、どの宗教にもあるのは『巡る』という行為なんです。神殿の周りをぐるぐる回って瞑想したり、歩いて聖地を巡礼することも共通しています」。栗生氏は「巡る」という言葉をキーワードに、特定の宗教に偏らない追悼空間を構成していった。

建築主より

子供たちも、外国からの旅行者も追悼空間でやわらいだ気持ちに



国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館館長

智多正信 Masanobu Chino

これまでは祈念館の存在が市民にもなかなか浸透していませんでした。静かな祈りの場所を中心にしていますので、観光施設のようなピエールはふさわしくないのです。二年前に私が館長になったとき、建物が表す意味がわからないという方々が多く、認知度を高めることも使命の一つと考えました。新聞記者の方々に働きかけたり、若い人たちにわかりやすいシンブルなパンフレットをつくったりしています。もう一つ、昨年は一〇周年を迎えた記念講座として、

栗生明+㈱栗生総合計画事務所の岩佐所長をお招きし、設計意図を語っていただきました。交流ラウンジが超満員になりました。長崎には平和案内人というボランティアガイドの方々が活動していますが、たくさん来てくださいました。お話から水盤や光の柱、回廊など、建物に込められたさまざまな意味がわかってきて、感動されたいです。それから、徐々に来観者が増えています。

また、原爆資料館と祈念館を一つのものとして捉えていただけたいと願って「資料館で学び、祈念館で祈る」という言葉を前面に出しています。特に子どもたちはますますさらな気持ちで資料館の展示を見るので、やはり緊張するんですね。こちらへ来たときに「皆で祈って帰りましょう」と言ってお祈りをしたあとの顔つきが明るく変わります。私はそれをもとても嬉しく思っています。

設計者より

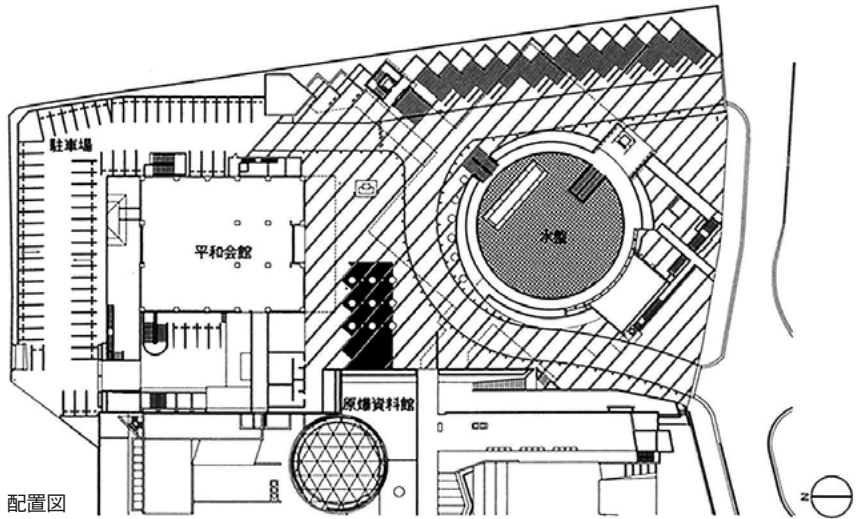
人が祈り、精神を集中する場のしつらえを学びました



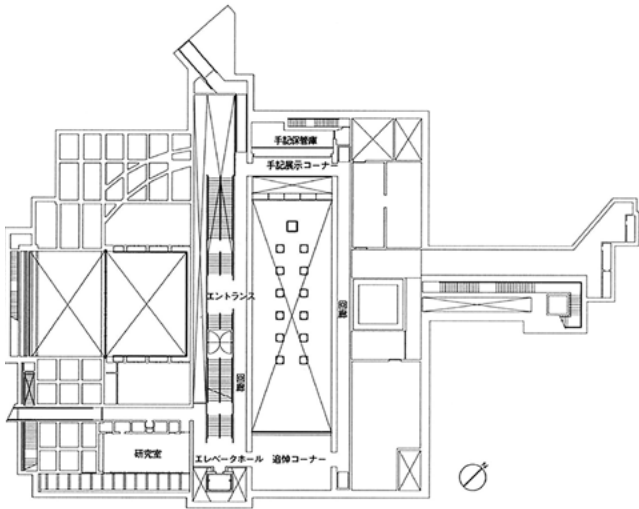
栗生明+㈱栗生総合計画事務所栗生明 Akihiro Kuno

一般に建築というと、地面を削って平らにし、目立つものを建てると思われています。しかし、姿が見えない地下空間をつくるのも建築です。私たちの事務所では地下に建築をつくるケースを多く手がけていますので、祈念館の設計案を変えて地下につくることを提案したときにも、違和感はありませんでした。地下に入ること、かえって地上の喧騒から離れ、ご遺族が望む静かな祈りの場所がつくりにやすくなり、よい結果を生んだと思います。建築はいらないと

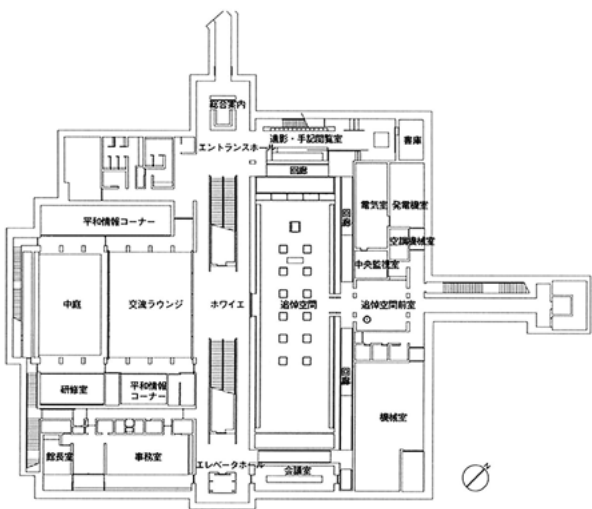
おっしゃった遺族の方々が「建築はこんなこともできるんですね」と言っていたのだというのを聞き、建築家として嬉しいかぎりです。振り返ると、二〇〇〇年ごろから、祈念館を含めて、宇治平等院の鳳翔館^{※2}、伊勢外宮の「せんぐう館」など、祈りの場に関連する設計をいくつか経験してきました。人間が祈ったり、精神を集中するためにどのようなしつらえが必要か、そのたびに学びました。しかし、一番得るところが多いのは、来てくださる方々の声や姿です。智多館長をはじめ、祈念館のスタッフの方々は来館する人たちに声を掛け、丁寧に説明をされていて、その反応を伝えてくださいます。感銘を受けた方が、「平和は大切ですね、来てよかった」とおっしゃったことや、追悼空間に半日おられる方もいると聞きました。いろいろな方々に喜ばれ、本当によかったと思っています。



配置図



地下1階平面図



地下2階平面図

国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館

JR長崎駅より 市内電車：赤迫行（系統番号1または3）で浜口町下車徒歩4分
バス：滑石・時津・女の都方面行で浜口町下車徒歩4分



計画概要

所在地：長崎市平野町7番8号
建築主：国土交通省九州地方整備局
設計者：栗生明＋株式会社栗生総合計画事務所
施工者：株式会社大林組、株式会社熊谷組
竣工：2002年12月
敷地面積：15,391.53㎡
建築面積：50.49㎡
延床面積：2,999.58㎡
構造：鉄筋コンクリート造
規模：地下2階 地上1階